

子イヌと子ども/カナダ (撮影: 原ひろ子氏 1961年)

これまで人とイヌのつきあいは、時代、地域、民族によってさまざまに変化しながら1万年以上も続いてきました。そしてイヌとのつきあい方は、それぞれ人びとの生活に深く根ざしたものでした。

現在の日本や欧米では、イヌはペットやコンパニオンとして人びとにかわいがられるだけでなく、警察犬、盲導犬、災害救助犬など働く動物としても活躍しています。これから先も、社会の移り変わりに応じてかたちを変えながら人とイヌとのつきあいは長く続いていくことでしょう。

■協 力

国立民族学博物館
 野外民族博物館リトルワールド
 市立函館博物館
 函館市北方民族資料館
 大阪府立弥生文化博物館
 植村直己冒険館
 (株)文藝春秋
 ペットライフ社

池谷 和信氏	市川 光雄氏
大塚 和義氏	荻田 昇氏
葛野 浩昭氏	児玉 マリ氏
小長谷有紀氏	丹野 正氏
寺嶋 秀明氏	原 ひろ子氏
松原 正毅氏	吉田 集而氏

■休 館 日 月曜日(7月20日は開館)

■開館時間 9:30~16:30

■特 別 展 一 般 250(200)円
 観 覧 料 高校生・大学生 80 (50)円
 小学生・中学生 50 (30)円
 ()内は10名以上の団体料金

第13回
 特別展

人、イヌと歩く
 —イヌをめぐる民族誌—

1998・7・19(日)~9・27(日)



ハンターとイヌ/コンゴ民主共和国 (旧ザイール)
 (撮影: 市川光雄氏 1990年)

 **北海道立北方民族博物館**
 Hokkaido Museum of Northern Peoples

〒093-0042 網走市字潮見313-1
 (天都山・道立オホーツク公園内)
 TEL 0152-45-3888 FAX 0152-45-3889

人は長い歴史の中で、いろいろな動物と関わりを持ってきました。中でもイヌ(食肉目イヌ科)は、人とのつながりをもっとも深い動物ではないでしょうか。

イヌは人と一緒に暮しはじめた最初の動物とされており、イスラエルでは約12,000年前の遺跡から人とともに埋葬されたと思われる子イヌの骨が発見されています。また、イヌは人の生活するほとんどの地域で普通にみられる動物で、人とのつきあいもたいへん幅広いものになっています。

この特別展では北方地域をはじめ、広く世界各地の人とイヌの関わりとその歴史について紹介します。



トナカイ群の接近を待つ／フィンランド
(撮影：葛野浩昭氏 1986年)

狩猟のパートナー

獲物を捕まえるのは簡単なことではありません。そのため、ハンター(狩猟者)は弓矢や銃、罾のような道具をもちいていましたが、イヌもこれらの道具と同じようにハンターの手助けをする存在でした。



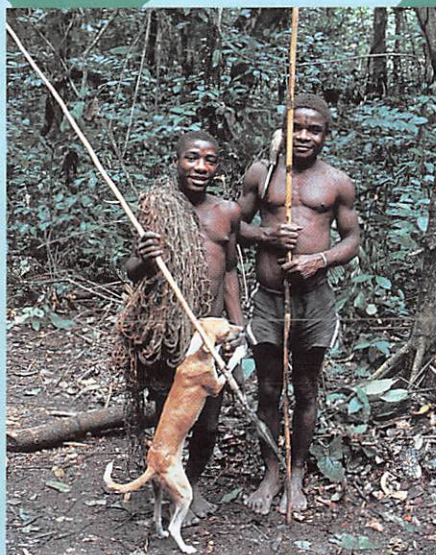
ムブティの猟犬用木製鈴／
コンゴ民主共和国(旧ザイール)
(野外民族博物館リトルワールド蔵)

雪原を駆ける

北方の積雪地域では、犬ぞりは冬の移動・運搬の手段の一つとして、人びとの生活の中で重要な役割を果たしていました。犬ぞりを牽引させるためには多数のイヌを飼育する必要がありました。



植村直己氏の北極点犬ぞり単独行
(写真提供：文藝春秋／撮影：安藤幹久氏 1978年)



投げ槍とネットを持って狩猟に出かける男たち／
コンゴ民主共和国(旧ザイール)
(撮影：丹野正氏 1983年)

家畜を守る・誘導する



オオカミ撃退用の牧畜犬用首輪(鉄製)／
トルコ共和国
(国立民族学博物館蔵)

牧畜にもちいられるイヌの役割は、大きくふたつに分けられます。ひとつはオオカミやクマなどの捕食者から家畜を守る役割で、もうひとつは家畜を追立てて誘導する役割です。



秋當地から冬當地への移動／トルコ共和国
(撮影：松原正毅氏 1984年)

素材としての利用



成人式の正装をした女性／
バブア・ニューギニア
(撮影：吉田集而氏 1984年)

イヌの毛皮は、北方の寒冷な地域ではコートや帽子などの衣類を作るのに使われてきました。また、歯では儀礼用の頭飾りや胸飾りが作られ、結婚のときに花婿側から花嫁側に贈られる地域もありました。